

毎月一回十五日發行(定價一部五錢一年郵税共五十錢)



編輯 森山 二郎  
發行 市田上縣野長  
校學門專絲蠶田上 所行發  
會 町縣南市野長  
社會式株聞新日每濃信 所印刷

## 製絲家と原料政策

小林 啓介

繰絲機械及び技術は原料繭を超越する事を得ず、之れ製絲業に於ける鐵則なり如何に優秀なる機械及び技術と雖も原料繭に含著せざる能率及び品位を製出するあたわず、畢竟原料繭に含まれたる能率及び品位を如何にして十分に生絲として現はし得るやによりて機械及び技術を價值付け得るのみ。

近時此點に着眼せられたる生絲販賣變遷により原料繭の統一と其品質の向上とを各製絲家に於て自己が事業經營の一つ項目として計畫するに至れり其形式として競て所謂特約養蠶組合の設立を見るに至れり。之を實現せんには次の四項目を完全に具備せざるべからず。

- 1、製絲家に實力あり誠意と見識あること
- 2、養蠶家に自覺あり統制ある團體たること
- 3、該組合の産繭の他に比して優秀なること
- 4、製絲家の負擔する養蠶獎勵

の經費は一貫目の生繭當り五錢位を至當とすべきも多くも一貫目當り十錢以内なること。之を要するに1、2、の製絲家及び養蠶家の心的狀態を除外するときは、製絲家の使用したる養蠶獎勵金と其れによる繭品質の向上程度とによりて特約組合の發達の有無を判定する事を得べし、即製絲家は貳拾錢の貫當りの養蠶獎勵費用を以て、二十錢の繭品質の向上を來したりとせんか？獎勵經費と之による繭品質の向上とを相殺され、市價より有利に養蠶家に繭代金を支拂ふことあたわず、即養蠶家は繭品質向上に十分なる經濟的勞力を爲さざるべし、繭品質向上を養蠶家に支拂はんか、製絲家は其負擔餘りに大なりこと、に於て製絲家の養蠶獎勵費用問題は自ら明なり、最も特殊の地方にして三十錢の經費を用ゐる六十錢の品質向上を來すが如き地方あらば此限りにあらざるべし。

即出來得る丈經費を減じて繭品質の向上を計り、品質の向上分より經費を差引きたる殘額は全部繭代金として養蠶家に返還され、製絲家は良品の統一せる原料を得て生絲品質を高めて有利に事業を經營し得べく、製絲家と養蠶家の兩者利益有て初めて眞の聯絡提携は起るべきなり、然らずんば徒に理論と實際のデレンマに落ち入りて各自其目的を達することあたわざるところなるは小生の經驗により斷定し得るところなり。

(署名大なる成に手の窓同)

山本三六郎著  
化學純絹絲の工業的完成  
Y0.30

菅原勇治著  
蠶絲業法規要論  
Y2.30

市田上縣野長  
會究研學科絲蠶 所行發  
(振替長野6413番)

## 針塚校長還曆祝賀式

十一月二十二日上田蠶絲專門學校同窓會主催にて針塚校長の還曆祝賀式が行はれた、當日全國より集るもの賛助員正會員を合せて約二百五十名、上田市公會堂の階上大廣間も狭きばかりの盛儀であつた。

これより先き昨年の代議員會において學校創立二十周年祝賀を業界不況に鑑み延期したのに対し、校長還曆の祝は是非其内祝として同窓會だけで行はふと

決議したのであつた、それより數同理事會を開いて胸像の作製依頼その他夫の手配萬遺漏なきを期したのである、種々困難な事柄にも出遇つたのであるがすべて敬慕する校長先生のお祝であるために小さい胸におさめてひたすら準備を進めたことである。

この日天氣晴朗、前日の曇天に較べて恰も先生の還曆を壽ぐ天意かと思はれた、午前九時を期して全員參集、階上大廣間に整列先生及御家族の御臨席を仰いだ。

林理事の開會の辭、松村理事長の式辭朗讀(寫眞に示す)あり續いて壽像贈呈を行ひ、賛助員阿形教授の祝辭、會員伊藤龍氏の祝辭があつて、校長先生の謝辭に式を閉ぢたのである。

壽像は伊藤龍氏の知人にして本邦彫塑界に重きをなす山本安曇氏が心血を注いで作られたものである、(寫眞にして別掲した通り)

阿形教授の祝辭は二十年來知遇を受けた教職員並びにその薫陶を受けた千二百餘の卒業生の心からの感謝を代表したもので感餘つて萬場目に涙したことである、更に伊藤氏の祝辭も亦同窓全體の心を、言葉を、先生の前に披瀝したものであつて、先生の謝辭の頃は誰一人として頭を上げ得るものもなかつた。

式が終つて後直ちに祝宴を開き、先生の万歳を唱え、乾盃して和氣霽々裡に散會した、それより先生をお送りし、直ちに母

校新講堂に席を移して第五回代議員會を開いたのである、紀念の蠶絲科學講演會はその翌日から二日間開催せられ、非常な盛會であつた。(M記)

## 臺灣の學術的價值

小林 貫一

北方文明の研究は、次第に我が國に與つて來た。北方文明が次第に研究されて行く間に、南洋の研究は、これまで取殘されてゐた。然るに學界の潮流は遠慮なく流れ流れて、汎太平洋學術會議も、日本で開かれた。

而してこの南洋の研究は、實は吾人に非常な興味を與ふべきものである。何となれば、日本國民は、嘗て南洋に發展した經驗を有してゐるからである。即ち呂宋や、爪哇や、暹羅や、安南には、立派な日本町を持つてゐた位である。

故に南洋の研究は、一は日本國民の過去の誇りを究明するやうなものである。また今日の如く到處に排日に悩まされてゐる以上、南洋の研究は、將來に於ける國民の發展の方向を決するに、主要な資料を與ふるものである。

實に南方文明の究査は、時代の要求と云ふべきである。而してこの究査の最便宜なところとして、こゝに臺灣が横たはつてゐるのである。

臺灣は、日本の領土中、一歩南洋に踏出してゐる唯一の足場である。さうして人文科學の上

式辭

針塚校長先生

本日茲ニ私共親シク御教導ヲ受ケマシタ一同ガ相集リ先生御還曆ノ御祝ヲ申上ゲマス事ハ誠ニ喜バシイ次第デアリマス

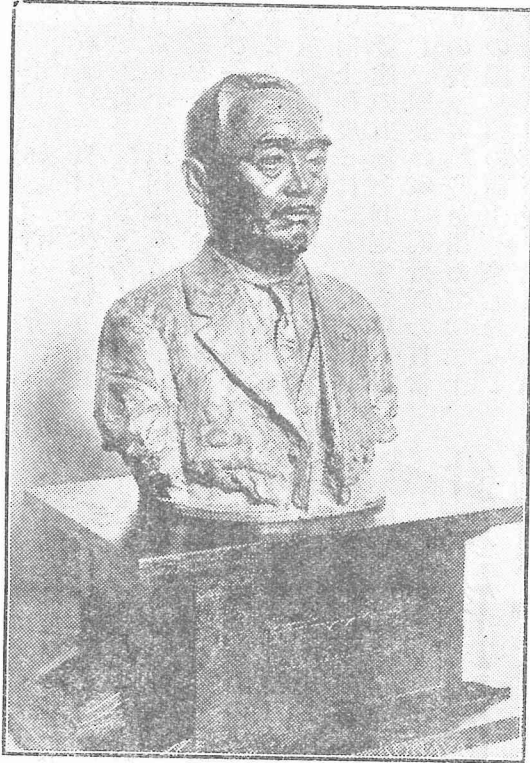
昨年私共ハ先生ガ近々還曆ヲ御迎ヘニナリマス由ヲ漏レ承リ此御喜ヲ申上ゲ且何時モ變ラヌ懇篤ナル御教導ニ對シ謝意ヲ表ハサンガ爲メ先生ノ胸像ヲ贈呈致ス事ニ協議一決致シ爾來夫々手配致シテ漸ク出來上リマシタノガ此ノ鑄像デアリマス

甚サ、ヤカナル贈物デアリマシテ此祝賀ト此感謝ヲ表示致シマスニフサハシカラスト御叱リヲ受ケルカモ知レマセンガ胸像ノ製作ハ斯界ノ權威山本安曇氏ガ心血ヲ注イデ出來上ツタノデアリマス上ニ私共一同ノ真心ノ結晶ト御認メ下サツテ何卒御受取り下サイマス様御願ヒ致シマス

歲月ハ水ノ流ル、如シトハヨク言ツタ事デアリマス願レバアノ春酣ナル四月半バ末柵モ籬モ無イ草原ノ中ニ建テラレタ本館舊講堂ニ於テ養蠶製

絲八十餘名ノ新入生ヲ前ニシテ開校最初ノ訓辭ヲ與ヘラレマシタ先生ノ溫容其儘ヲ春秋茲ニ二十有一年内容外觀共ニ兼備セル母校ノ現校長先生トシテ還曆ヲ御迎ヘニナリマシタ先生ニ見出スノデアリマス

今コソ蠶絲業界ハ文字通り多難ノ秋デアリマス 斯界開發更生ノ爲メニハ先生ヲ信賴スル外アリマセン 私共ハ先生ノ益々御自愛被遊舊ニモ増シタル御健康ヲ保持セラレン事ヲ御祈致スト共ニ末永ク御鞭撻下サル様御願致ス次第デアリマス是ヲ以テ先生ノ御還曆祝賀並



(作氏墨安本山) 像長校塚針

グズニハ居レマセン蠶絲ノ二字ヲ名ニ負ウテ生レ出デシ母校二十一年ノ歴史ヲ飾ル數々ハ一重ニ飽ク迄蠶絲専門教育ニ一新機軸ヲ出サントノ先生ノ卓見ト涙ニ餘ル獻身的御努力トノ賜デアリマシテ私共其恩惠ニ浴スル一同ハ心カラナル感謝ヲ捧グズニハ居レマセン

胸像贈呈ノ言葉ト致シマス言辭甚整ハズ失禮ノ點ハ御寛容ヲ願ヒマス昭和六年十一月二十二日上田蠶絲専門學校教職員並同窓生總代松村季美

還曆祝詩

信山峻秀信川雄 靈氣天來朝夕通 不深先生風骨健 煙霞藏藥籠中 育英示範律身真 贊與化育是斯親 樂爲仁安天祐壽 華甲猶看顏色新 三山二水秀靈地 出此貞心高節人 訓育諸生緣紀綱 壽似靈山萬歲長 福如滄海千年潔 和氣撫劍放龍光 朗吟通古律 君家有亦存天慶 教授蠶絲事 多季字 鳳馳榮與譽 併得壽康 高傑嶽山立 爲容刀水長 惟今遇華甲 爲薦九霞觴 塚田桂岳

第五回代議員會各支部出席代議員氏名

支部名 代議員氏名  
東京 高島秀男 中島 暹  
神奈川 森田三郎  
茨城 長見公祐  
兵庫 原田種龜  
兵庫 沖 濤治  
兩毛 小澄 晉 今井 衷  
唐澤正平

御挨拶

拜啓向寒之時節各位益々御清健の段奉欣賀候扱て此程は小生還曆に相當する爲め盛大なる祝賀會を御開催被下且つ名手の作製に係る壽像御贈與を被り御芳情洵に難有厚く御禮申上候。蠶絲業界空前の不況に陥り國事益々多端なる今日諸君の斯る御企圖に對して御辭退申上ぐるを至當とも存候。其折角の御企に付悦んで御芳情に甘んずること致し申候。只管諸君の御熱誠の籠る御懇情に對し感謝し恐縮するのみに御座候。御惠贈の壽像は永久に珍藏し之を子孫に傳へて諸君の御誠意を可奉慰候。此段乍略儀茲に本紙を借りて不取敢御厚禮の御挨拶申上度如此御座候 針塚長太郎

理事 蒲生俊興 林貞三  
倉澤美徳 加美好男  
高木三治 齋藤菊雄  
川船卓爾 森山二郎  
原田兵衛 小林茂樹  
沖 濤治 宮田鐵五郎  
二宮九二二 塩原克己  
岡村源一  
濱井壽夫 塚田鎮磨  
野崎 清 小山二郎  
岡部彌平

にも、自然科學の上にも、莫大な價值を示してゐる。

臺灣は、熱帯に踏み出してゐる上に、垂直的には温帯はおろか、更に寒帯にまで手を延ばしてゐる。それ故植物學、動物學、昆蟲學、農學、林學、醫學、氣象學その他百般の自然科學の研究には或點に於て、世界に類例稀なる好對象を提供してゐる。

更にこれを地平線的に觀察すると、東には太平洋とその民族があり、西より南にかけては、南支南洋の錯雜せる民族がある。臺灣は、これ等の民族の間に介在して諸種の文化を包容してゐる。而して日本國民が、この地を開發すべき位置に立つて、學術的調査を進めて見ると、中には上代の舊友に邂逅するやうな感を生ずることがある。かくして臺灣は民族學、言語學、文學、史學、その他あらゆる人文科學の研究にも、また得難い好對象を提供してゐる。

我々の景仰して措かざる北白川宮殿下の御靈威によつて、臺灣が完全に日本の版圖になつてより以來、我が國の上下は、この領土を良くし、生民の幸福を圖ることに全力を盡した。土匪の全滅、市街の造營、交通機關の改善、電信電話の架設、港灣の修築、衛生の施設等よりして財政の獨立、生命の安固、慈善事業の普及殊に教育の勃興となつて、遂に今日の臺北帝國大學まで出来るやうになつた。

(以下次號)

### 同窓レビユウ

M 生 作

第一景 理事會、風景

時十一月十二日

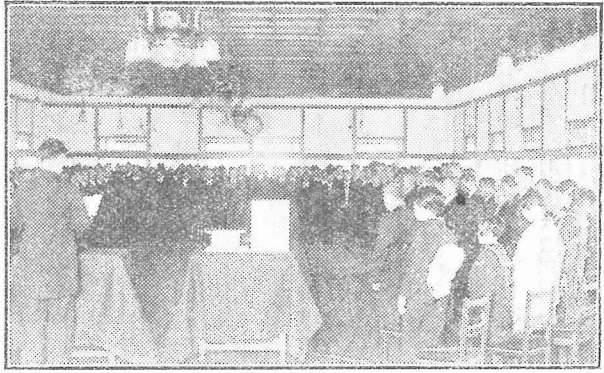
處 靈室宿直室

人 高木、蒲生、川船、林、倉澤、加美、齋藤、森山、飯島

倉澤——では皆さん(在田同窓幹事全員)今日は御苦勞でした、當日は夫々分擔について万手落のないやうに御盡力願

針塚校長還曆祝賀式

(松村理事長式辭朗讀)



ひます、——これから理事會を開きますから、理事の方だけ残つて他の方は御引取り下さい、(幹事一同残つた煎餅を恨めしそに眺めて退場) 倉澤——さて今日は理事會が急の公用で御都合が悪くて出席出来ませんから私から御相談申し上げます、各支部提出問題に就いては先日理事會で研究して貰ひてありますが、尙御意見がありましたらお聞かせ願ひます、今日は私の方からは例の社團法人の問題であります、

倉澤——イヤあどうも難かしいもんだよ、俺あ耐えねえよ金、飯島——倉澤先生悲鳴をあげてるが、アハハ何かね、そんなに難かしいかね、倉澤——俺あたんとも無い頭の毛が抜けるよ(一同哄笑) 高木——人の髪の毛は八万本あるさうだから少し位は、そうさねえ倉澤君の頭ぢあ少々氣の毒だが、倉澤——おい君は委員長ぢあないか、僕より餘計抜けてもいいで、そう言へば君も大部薄くなつたやうだ、蒲生——ホンにね、高木——まあハゲの話は止めやう、君議事を進まして呉れ給え、森山——一体社團法人にした爲めに生ずる利益はどの位だつたかね、林——そうさ、金にして一年に今の状態では百二十圓といふものだらう、川船——その外に對外的利益がある筈ですよ、高木——そうだ、對外的に人格を備へること、信用を高めることだ、理事者が變つても法人の人格は變りはないし、理事者はいつても法の制裁監督を受けなければならぬ、森山——先の代議員會に提出された理由はどこにあるんだ、種々な意見が出たのでその調査研究をかねて委員に付託されたのだ、倉澤——利益はあるがその反面も考へて見なくちあらん、色々研究して見ても可なり難點があるよ、齋藤——そりあ兩面を見なくちあ不可んよ、とにかく法人になると難かしいよ届出登記の怠慢によつて理事者は五圓以上二百圓迄の罰金に處すと云ふんだよ、倉澤——例へば俺が、齋藤——ウーン皆んな連帶だ、飯島——イヤハヤ、倉澤——そうなれば専任の理事者が是非要るよ、吾々のやうに授業もすれば研究もやらなくちあらん、就職も心配しろ同窓會の事務もそれといふことぢあとして高木——そりあほんにとやり切れたものぢあない、然し今の同窓會ぢあ専任に人を頼む金がないぢあないか、林——(むづかしい顔をして)とても駄

目だ、(幾分笑顔になつて)誰か十萬圓も寄附する者はないかね、蒲生——製糸の方にそんな人ないかね、林——そう、一二萬圓蓄めた者はあるがまさか全財産を投げ出しやしない、加美——金が自然に蓄るもんか、利息位積んでゐたつて何時になつても埒があかないよ、思ひ切つて一期に徴収するさ蒲生——我々もまだ蓄積時代で消費時代ぢあないからね、もう少し辛抱するんだね、倉澤——とにかく委員の責は果して、すつかり代議員會に報告はするが、あとは頼んだぞ、助けて呉れなけりあ(頭へ手をやつて)ここがそれ……(あとは笑聲に消されて聞きとれぬ) 第二景、議事會風景 時十一月二十二日 處 新講堂 人 役員、代議員大勢 古山——議長々々、山形、森田(議長)——ハイ古山君 古山——本會役員旅費がそればかりで支部との連絡が充分にとれるとはどうして思はれない、須く大いに増額すべし、芝——議長、東海、議長——芝君、芝——山形支部のイ及ロの問題は豫算案議の際にゆづり、それまで保留願ひたい、古山——議長山形、議長々々々々議長——只今芝君よりの御提案は至極もつとも思ひますから御異議がなければさういたしました、次に山形支部の問題を説明して頂きます、古山——この問題は丹後會の一の問題と關連して居りまして、先程丹後會の方から説明のあつたやうにすれば會費整理の方も大いに成績を擧げることが出来ると思ふんである、岸野——議長山形、議長、わたくしは無條件賛成、良いに決つてゐることを色々論議するすつて要はない(岸野古山兩君席を並べて大いに共鳴する) 高島——議長東京、議長——高島君、高島——本問題では先程藤田君からも細い參考計算を示されたが、これは一つ引

くるめて役員に委任した方がよいと思ふ議長——それでは高島君の御意見に御賛成の方は舉手を願ひます、——多數のやうですからさういふことに致します、次に豫算の件に入りますが、その前に先程指名しました委員會を開いて頂きまして本會役員を餘衛して頂きます、それまで約十分間休憩いたします、第三景 二次會風景 時十一月二十三日夜 處 或る料亭 人 野崎、小山、加美、二宮、森山、某靈種家、某大官、(名刺を眺めながら森山に向ひ)ナンダ地元のくせに名刺なんか出さなくも知つてらあ(大分醉眠だ) 森山——敬意を拂つたのが悪いがフザケやがつて(ハゲ頭を殴る) (大官は二宮と論議してゐる、加美小山は野崎の兩側から詰寄つてゐる) 加美——おい結論を先に言へばなんだ小山——ハハ今日の講演ぢあないが、簡単に結論を先に言へばカチ 野崎——知れたこつた、教へ子だから何時迄も小供だと思へば間違ひだ、元教へた小供だつて博士も出れば大臣にもなるイヤヤ實業界に居たつて相當偉い人物は出てゐる、ソリアコつちからは何處までも先生だ道德的な、それを犯しちあ不可ん、けれど俺の今日言つたこと判んないやうなのは自ら墓穴掘つてゐるんだ、野崎——野崎先生、日儲取りあどうした日儲取りぢあないか、精神勞働に對する報酬だもの、偉い位階だから官吏だから正何位だから遊んでゐても日儲賃を呉れるといふ道理あない、無官だから無位だからつて働きに應じた報酬を出さねいつてことあるもんか 加美——そうさそうさ、まあいゝから飲め、おいお酌しろ、(こちら大層な氣煩なのね一ついかが、アラ委しお酌するワ、テな聲がポツポツ聞える) 森山——野崎君の今日の講演は一番氣に入つたよ、外の講演は僕等には少しも判らぬが君の話は判りすぎる、二宮——君にも判るか、俺はいつもそ



年賀廣告募集

(再録)

千曲時報編輯部

平素仕事の多忙に取紛れて遂思ひながらも疎遠に過す我々お互には年一回の年賀郵便こそ今年と明年の交誼の連繫として實に有意義なものであるが、兎年末の繁忙に追はれて思はぬ缺禮をも致して勝なものであります。そこで我時報部は左の通りの案で同人諸兄の徒勞を出来るだけ節約すると共に年賀郵便の能率を百%以上に擧げたいと思ひます。諸兄は是非本案に御賛成の上一口御申込の程を願ひます。

一、本紙に年賀廣告を出された諸兄同志は年賀状のやり取りを一切廢する事

二、本紙は同窓會員全般に送り届けられて居ますから出された年賀廣告により會員全般に年賀を出したのと同じ事になります

三、廣告料金は「金壹圓也」を戴きます

四、御申込は千曲時報係宛、御送金は同窓會宛「振替東京四三三四一番」へ

告!!

してばかりゐるでないか  
森山——打消すのではないが君等を看める役だから仕舞ない、實際馬鹿を見てゐるのは自分達だがこれも自然に従ふより仕方がないんだ、新舊思想の間に立つて謂はば俺はバツプア—なんだ、双方の言ひ分を真正直に曝露したらそれこそ騒動だよ

小山——一騒動どうだんね

森山——馬鹿、時に、今度も困つたよ、ウンさつき話した通りあゝいふ始末でな、何か言つて見てえのだ、それに附和雷同する馬鹿共があるから……

(外から隣り座敷の連中だらう襖を蹴飛ばしてドヤドヤと崩れ込んで来る、止めるやめるといふ聲が聞えて眞赤な顔が四つ五つ、その中に倉澤君の頭も見えて部屋は空氣は頓に明るくなる)

喪中(父)に付年末年始の禮を欠く

昭和六年十二月

佐藤利一

北信支部總會

十一月一日午前十時更級郡上山田温泉清風閣で當支部第五回總會が開かれた。

流石百四十餘名の會員を擁する大支部の事ではあり、折柄の秋晴れの好天氣に恵まれた事として集まる者六十五名の多きに達し、本部の理事長を初め幹部の方々も支部では平會員として總出席ナカの盛會であつた。やがて鶴田支部長の開會の挨拶に續いて次の如く會は進んだ。一、支部長よりその後の支部の經過並會員の動靜が報ぜられた。

昨年の會員数は一三二名であつたが他へ榮轉した者二九名及死亡一名を減じ、新加の者四〇名を増したので現在一四二名となつた。

死亡一名とは既に御承知の製絲科第一同卒業の水島由太郎氏である。同氏は人々も知る長野市會議員として令名あり特に辯論の雄として又經濟通として市會を牛耳つて居つたのである。當選三回次は縣會へ出られたのに誠に遺憾である。

二、金崎幹事より會計報告があつた。昨年の總金一〇六圓餘有るので一ヶ年の支部の生活費四〇圓餘を差引いても六〇圓餘の残となる。此の金を當總會の重要な附帶事項たる懇親會の補助として如何と提案した處滿場異議なく議決以御座儀が一圓の會費で酒も料理も亦御酌も豊富であつた。

三、役員の変更は詮議委員の深重義議の結果支部長として三度鶴田氏を推薦する事となり、夫々他の役員も決り代議員も本年から一名増しの五名となつたので二新味が加へられた。御案内の如く鶴田氏は養蠶科第一回卒業の大先輩であり地理的關係から考へても同氏に御願する他ないのである。世帯の大い當支部の親父として誠にふさわしいのである。四、代議員會提出問題の協議は當支部としての提案なきため主として各支部の提出問題に就き支部としての意見を協定した。

猶支部規則の改正其他二、三に就て協議した。斯くして諸過ぎ一先づ會を閉ぢた之れからが愈々本舞臺である。◎松村氏の歐米視察談

同氏の視察談は既に單行本として報告發表せられ又千曲時報にも數回に亘つて載つて居たから御承知の事と思ふが、今度は方面を變へて漫談的に敍い所を御話し願つた。

荒蕪たるシベリヤ平原を走る汽車の中で浴衣を着た彼氏がダン盛への小便、丁株の一青年から貰つた咬煙草を仁丹か萬金丹の如く飲んで危うく死線を越へた話などは佛國で言葉が好く通じなくて怪しげなホテルへ案内され財布を無くしたり伊太利の宿屋で吊敷眼に氣付かず一晩中蚊軍の襲撃を受けマラリヤの心配迄したなどの失敗談から、北歐の人類學者たるスエーデンのルンドボルグ博士を訪問して松村博士と間違へられ御座儀で立派なる報告書を頂戴したのはよいが専門の人類學の問題で面喰つたり、前北大總長佐藤博士と友達に思はれ眼をパチクリした話更に進んで各國の風俗や人情の機微に迄亘つて面白く談られた。

◎討論會

議長としては疑國會等で常に議長としての腕を振れて居る猪坂直一氏を御願ひする事とした。議題としては一、田園生活か都會生活か、二、春か秋か、三、未亡人再婚の可否の三條を提出したが時間的關係上一題しか出来ないで、何れを選ばべきかに對しては滿場一致第三問題と決した。

そこで提案者より未亡人の家庭、年齢容姿等に就ての説明があり愈々討論が始まつた。

小林氏先づ發言して年も若く容姿も相當よいのだから周囲の人に心配されない様早く身をかためる必要あるとて未亡人の再婚を可とすれば、小山氏は生活上の經濟的心配も少ないのであるから年は若い子供のため獨身を通過すべきであると反對がある。流石生理學者だけあつて蒲生氏は生理上再婚の必要を説き反之松村氏は尼の生活から始まり遂には本業の蠶蛾の狀態まで説明して不賛成を稱へ、土屋君も之に賛成殊に充分生活出来るの

だから何も再婚の必要はない、學生の多い上田邊に素人下宿でもやる事から……

……若き燕々迄脱線して大笑ひ。此の時小林氏は立ち上り本問題に理論上主觀的客觀的の二方面より考察すべきものにして、前者は女ならでは不明のため後者に就き一九三一年式のモダン思想よりして再婚の可なるを力説した。次で猪坂議長は「忠臣二君に仕へず」「貞女二夫に見えず」の諺に反する現時の風潮を歎き子供のため是非獨身を通過するの必要を近親者の實例に就き述べれば、齋藤氏は生物學上より之に反對し再婚論を強調し倉澤氏亦新しい思想の流に棹し之に賛成森山中澤氏も自己の立場より考へての賛成論更に須田氏の様な子供を小僧や子守にやつても猶結婚すべきであるとの強い賛成論者も飛出した。斯くて甲論乙駁議論囂然として空氣頓に險惡となつた。が流石名議長だけあつて之ら良く之を收拾し採決の段取りとなり、土屋、小山氏等の猛者連の不賛成の怒叫とあつたが遂に五三對一二の多數を以て再婚可の勝利となる。之れ現代思想の反映か將又會員中にモダンボーイの多かつたためか?

◎懇親會

地元村長として飯嶋氏開會の挨拶を兼ね飲酒の極意秘傳を特に公開せられ。それによると一滴の酒は數回舌と上顎とにて味ひ乍ら飲むので誠に酒の經濟になり幹事は此點樂である。然し本々は一人當一本半の確定であるから奥傳の飲み方ではなくとも中傳か初傳の飲み方で差支ない料理はよし、酒は美味し而も共にその量豊富であり、氣の合つた同志の集ひであり之に支配するに當地の美形數名の事とて快談痛飲。時に自己紹介あり、藝者の手踊りあり大いにメートルを擧げ時の移るも知らなかつた。

◎大活動寫眞

松村氏苦心の撮影に係る歐米各國の活動寫眞が映寫された。之によつて會員の殆んどが未知の土地を案内され、伯林の街や巴里の凱旋門或はロンドンネルソンの銅像に偉人を偲び、米國加州の邦人の活躍狀態、大農組織、さては秩父丸の船中生活まで詳に知る事が出来た。案内者松村氏の勞を感謝する。(M.K.生)

第三回蠶絲科學講演會 講演集 豫約募集

今回開催せられた蠶絲科學講演會は連日聴衆堂に満つるの盛況を呈した、受付に記入された聴講者名を見ると廣く官界實業界を通じて全國からよくも斯く參會せられたものと驚く次第である。

今回の講演は何れも時機に適したもので斯業關係者の聴いて以つて裨益するところ蓋し大なるものがあるであらう、乃で當時都合悪くして講演を聞くことの出来なかつた方々のために態々三名の速記者を聘して詳さに筆記しこれを上梓して頒つこととした、値段は出来上つて見ないと判らないが二圓以上二圓五十錢以下、二月頃迄に配本を了したいと思ふ。

本年中に豫約金一圓を前納する方には會員と會員外とを問はず優待割引をすることとしたから、同封の振替用紙を用ひて講演集豫約金の旨明記の上至急御拂込みを願ひます。

蠶絲科學講演集

蠶の白癩病菌の生態並に防疫に關する研究	長野縣蠶業試験場技師 勝 又 藤 夫氏
蠶絲業の改良と蠶絲科學	農林省蠶業試験場技師 東京帝國大學教授農學博士 塚 英 吉氏
蠶絲業の不況と其の對策	農林省蠶業課長農學士 明 石 弘氏
養蠶業經營の本質と其の指導原理	蠶絲業同業組合中央會理事 野 崎 清氏
線絲張力に關する研究	上田蠶絲專門學校教授 林 貞 三氏
夏秋蠶期に發生する軟化病に就て	長野縣蠶業試験場技師 水 井 壽 一郎氏
生絲相場論	東京高等蠶絲學校教授 福 本 福 三氏
セリシンの物理化學	上田蠶絲專門學校教授 金子 英 雄氏

京 都 (第三回)

確 永

小事件

「君は上田の卒業生で青木友彌といふ君を知つてゐるかね」

「ええ、知つてゐますよ。青木君は僕の同期でしたよ」

午後四時頃である。突然Y氏がUの下宿へやつて来てさういふ。UはY氏の妙に友人青木君を疑るやうな質問が氣にかかつたので、

「青木君がどうかしましたかね」と訊ねて見た。

「その青木君はいま失業してゐるかね」

「ソウ、失業してはゐませんがね」

「その青木君はどこにゐるかね横濱かね」

「神戸にゐますよ。つい一月前に僕は青木君を尋ねて行つて一晩泊つて來ましたよ」

「さうかね、どうもかしいね實はその青木君が、今日役所の方へ僕を尋ねて來たかね」

「そうですかね。そんな筈はないと思ひますが、そんな男ですかね。丈は高いですか」

「高いね。い、体格の男だがね」

「眼鏡を掛けてゐましたか」

「いやかけてはゐない」

「どうもかしいですね。青木君は丈が低くて、眼鏡をかけていつもにこにこしてゐますが」

「どうも變だね。僕は騙りぢやないかと思つてゐるよ。實はね午前十時頃僕のところへ來たんだ」

「失業してゐるが、いま銀行の方に口が掛つてゐる」といつてゐるんだ。それから僕が「丁度君はいゝ處へ來た。今夜U君やH君が僕の家の方へ來ることになつてゐるから、ゆつくり僕の家で話さう」といふと「いやUやHに逢ふことはこの際止めた」といふんだ。「何故か」と聞いたら「いま失業してゐるUやHに逢はせる顔がない」といふんだ。

「いや、どうもそいつは騙りかも知れませんが、この三月H君が上田へ行つたら、埼玉・群馬の方でU君を騙つて同窓生の家を歩いた男があるとかで、H君が憤慨してゐましたがね。或はそいつかも知れませんが」

「さうかも知れないね。昨晚大澤のI君のところで泊つて來たといつてゐるんだがね。それにしても上田の様子をよく知つてゐるね」

「さうですか。どうもちと、おかしい奴ですね」

「兎に角今晚八時にその男が僕のところへ來ることになつてゐるからH君を誘つて來て呉れ給へ、さうしたら正体がわかるだらうから」

VはH君を誘つて八時半頃Y氏の宅を訪ねた。Y氏の二階では話聲がしてゐる。例の男が來てゐるに相違ないといふ思つたU等が二階へ上つて行くと、顔をかくしながら階段を矢のやうな早さで下つて來る男に出逢つた。續いてY氏は素早く下へ降りて行つて件の男をつかまへて

了つた。Y氏の奥さんが豫め錠を下しておいたので、この男は逃げ出すことは出来なかつたのだ。

「おい逃げてでも駄目だぞ。兎に角二階へ上れ」

それから三人も二階へ上つた「おい貴様は埼玉の方で、盛んに俺を騙つて歩いたらう」

H君が大きな聲で呟鳴つた。大男ではあるが流石に多勢に無勢ではかなはぬと觀念してか、抵抗はしない。

「何だ！ そのざまは…… 坐れ！」

「外套をぬげ！」

いはれるまゝにこの男は外套をぬいで坐つた。

「貴様は何處をどう騙つて來た？」

「白狀しろ」

「正直にいへ」

なかなか白狀しない。

「白狀しないか。しないぞこれだぞ！」

と、H君は自分の革帶をぬいて一つなぐつた。まだいはぬ。

「もう一つか」

と、革帶をグルグルに廻してゐるが、それでもいはぬ。

「まだいはぬか？」

と、續けざまに五つ六つなぐつた。

「云ひます」

「早くいへ！」

「申わけありません」

「やかましい。早くいへ」

「大津の前には何處を騙つて來た」

「どこも騙つては來ません」

「うそをいへ！」  
「まだいはいぬか」  
H君の革帯が又飛びさうだ。  
「埼玉の方を歩いて来ただけで  
す」  
「うそをいへ！ 名古屋もやつ  
て来たぢやないか？」  
「はい」  
「何故嘘をいふ？」  
「嘘をいつても駄目だぞ！ 同  
窓生にはちやんと通知が廻つて  
ゐるからな」  
かうして白状したのを書き取  
つて見たら被害が八つ程あがつ  
た。  
「貴様は同窓生の名簿を持つて  
ゐるだらう」  
「持つてゐません」  
成る程持つてはゐるが、手  
荷物の一時期の札が出て来た。  
そこで夜の一時頃であるにも拘  
らずH君自ら圓タクを飛ばして  
停車場へ行つて、その手荷物を  
取つて来た。立派なトランクだ  
開けて見ると、中から着物が  
一着と名簿（修正したもの）で  
どこから盗んで来たのだと、フ  
エルトの草履と、指環が二箇出  
て来た。  
「この指環はどうしたのだ」  
「盗んで来たのだらう」  
「いゝえ。さうぢやありません  
汽車の中で賣つてゐるのを買つ  
たのです」  
「どうするつもりだ」  
「カフェーの女給に賣りつけよ  
うと思ひまして」  
「いくら位で賣るつもりだ」  
「十圓位で」  
「買つた値はいくらだ」

「一圓五十錢です」  
「ふざけるな」  
「このトランクは貴様のものか」  
「はい。兄さんに貰つたのです」  
もう既に午前三時だ。どうし  
たものか。警察へでもつき出し  
た方がいゝか。それともこのま  
ゝ追ひ出した方がいゝかと相談  
をして見たが、わるさの程度も  
はつきりしないので追ひ出して  
やることにした。  
「以後氣をつけろ！」  
「げんこが三つ四つ飛んだ」  
「はい。氣を入れかへて眞人間  
になります。どうもありがたう  
ございました」  
それから相談の上、その旨同  
窓會本部並に各支部へ向つて  
通知を出したり、全然被害がな  
いといふ返事もあれば、被害が  
甚大であるといふ通知もあつた  
で、これを綜合して見ると被害  
の範圍は埼玉、群馬、それから  
名古屋、滋賀等であることがわ  
かつた。  
このうちその多くは一泊二泊  
の室をかしたと、二、三圓の  
旅費を呉れたに過ぎなかつたが  
名古屋のK氏は最も被害が甚だ  
しかつた。この男はK氏のどこ  
ろへ一泊して、その翌朝家をK  
氏と一緒に出かけ、再び引き返  
して来てK氏の奥さんのをらぬ  
を幸ひ「私はKの親戚のものだ  
が、この家を開けて呉れ」と近  
所の人に頼んで家を開けさせて  
二、三時間もかき廻した上、悠  
々立ち去つたのだといふ。京都  
迄持つて来た指環は奥さんのも

の（指環のサツクは奥さんのも  
のらしいが、中味は違つてゐた  
やうだ。多分どこかで賣り飛ば  
したんだらう）に相違ない。そ  
の男の着て来た服も外套も足袋  
もトランクもK氏のものであつ  
たといふ。  
Uは下宿屋の二階から東山を  
眺めて立つてゐた。もう五月も  
暮れん六月が来ようとしてゐる  
彼は三月學校を卒業したもの  
就職は全く見當がつかない。あ  
るかと思ふと駄目、又あるかと  
思ふとそれも駄目。就職運動を  
始めてからもう一年にもなる。  
それなのに口は口は閉ぢない。失  
業者が街頭にごろごろしてゐる  
と聞かされてゐる。あちらの下  
宿にもこちらの下宿にも卒業は  
したが口が閉ぢないといふ男がごろ  
ごろしてゐる。みんな憂鬱な顔  
をしてゐる。  
Uは驅りの男のことを考へて  
ゐた。あいつも失業者の一人か  
も知れないと。  
(一九三二、一一、二九)

幼兒を持つ親達へ

石原 石司

十月號の時報へ碓氷君が「京  
都」といふ題で種々と書かれた  
末尾に僕の家庭の事が書いてあ  
つた。續けて二人の子供を疫痢  
で死なした事「それでもまだ小  
さいのが一人あるから多少慰め  
られる」事等  
然し今では小さいのがある爲  
に返て寸刻の油斷も安心も出来  
ない丁度中空の硝子玉を風呂敷  
に包んで歩いてゐる様な氣持が  
してゐるのだ。  
最初の子は女の子で最う満四  
ヶ年七ヶ月で非常に良く太つた  
血色の良い子であつた。昭和四  
年の九月末毎日霖雨續き少しも  
秋らしくない様な氣候であつた  
九月二十八日朝元氣よく送り出  
し。夕方は母親と一緒に番傘さ  
して風呂迄行て来た程元氣な子  
が晩の十時頃腹痛を訴へ吐瀉と  
下痢を併發醫藥も全く受けな  
い情態でやむを得ず朝の五時頃  
再び來診を乞ふた時は既に容体  
は危険に類し、洗腹、食鹽注射、  
手足の補温等、あわただしく一  
通の處置を爲し十時頃赤十字病  
院へ入院させた、此處で再び食  
鹽注射と葡萄糖の注射、強心劑  
の注射を爲したが瀉を訴へる事  
甚しく、吐瀉と下痢は依然とし  
て止まない。廿九日の晩の八時  
頃からは連續的にカンフル注射  
で十五分づゝの余命を續けさせ  
て行くに過ぎない容体となつて  
しまつた。此時の原因は何んの  
爲だが判然しないといふも柿であ  
つたらしい。それは生死の境に  
ある子の口から「柿を！ 柿を！」  
と數回繰り返へされた其時は何  
んの事だか判らないで居たが後  
で死んだ子の頭具箱を焼却しや  
うと思つて持ち出して見たら嚴  
く喰べる事を禁じておいた半熟  
の柿が三つ皮もむかざる喰ひか  
けとなつて出て来た、どうも何  
處かでもらつて喰つたらしい子  
供心にも喰へた事が知れると叱  
かられると思つて自分のおもち

や箱に秘しておいたらしいので  
ので。  
子供に對してあまり嚴重に何  
を喰べたらいけない。此れを喰  
べたらいけないといふ仕付け方  
はほんとに良くない事だと思つ  
た。  
矢張り他人様に何かおもらい  
したら持つて来て見せる様に云  
ひ聞かせることだ。  
それに又疾病と判明した重体  
な子供を如何に法が何んであつ  
ても動かす事はいけない事だ此  
れは醫者が動かさないで證明さ  
へすれば大抵は其儘で行ける様  
だから。  
次の子は男の子で満二ヶ年と  
四ヶ月で一ヶ年半位の時から腸  
を悪くして一時は駄目だと思つ  
た位重体であつたのが満五ヶ月  
の病氣に對し殆んど寢食を忘れ  
ての看病的結果すつかり丈夫に  
なり發育も普通一般の子供と變  
りない様になり休も良く太つて  
やれこれで一と安心といふ時は  
コロリと逝かれてしまつた。  
引きつゞき嫌な雨ばかりで土  
用だといふのに羽織を着たい様  
な七月十一日の朝一家揃つて何  
の異變もなく朝食を済ました。  
それが二時間後の十時頃にはウ  
ト／＼と眠りかけ熱は三十九度  
前後ですつかり元氣がなくなつ  
てしまつた。縣廳へ電話がかゝ  
つて歸つて見た時は顔は眞度の  
蒼白只うつとりとして「ウウゴ  
ト」を云つてゐる様だつた。今  
度こそ前の經驗もあり近所に醫  
者もあるで總ての處置は發熱  
と同時に進行醫藥も全部其儘お

事にしてゐる。

總して豆類は子供の爲に一大敵國であるらしい。それから第二回目の失敗があまりにももうくやつて來た事は斯うした結果を引き越す迄に種々の原因となる因子が含まれてゐたかも知れないそれは特に子を持つ母親の爲に申し上げ度いのだそれは母親の用ふる白粉から來る子供の鉛毒だが此れは眞度知らず／＼の間にやられてゐるらしい。

子供の顔色がすぐれないで多少下痢症の子は大抵これであるらしい斯様な子供が一朝重病に犯された時には到底望みはかけられないこの事だ。

だから妊娠五ヶ月位から授乳中は全く母親は白粉と縁を切る事だ、子供の爲に、そして一家の幸福の爲に。

今僕の處の殘された一人の小さい奴がどうやら鉛毒らしいので眞度閉口させられてゐるだから中空の硝子玉を風呂敷に包んで歩いてゐる様な氣持がしているのだ。かうなつては眞度樂ではない。

白粉の中でも練白粉は最も悪い。又風呂から出ておしろいを付けて子供に接する事が最も悪い。おそろ可き白粉だ。田舎の子供が丈夫で少し位の病氣も放任しておいて直つてしまふのはおしろいに縁が薄く土に縁が深いからかも知れない。

「かう書いてくると僕の家内が安白粉をうんと付ける様だが……否少し位用ひてもピンント子供の反響のアル不運の家庭に特に

[illegible]

竹内清君見舞金募集決算報告

拜啓先般竹内君三年來の病床生活と家庭の現狀を見るに不忍見舞金の募集を計劃致し候處同下多數の諸兄には早速御賛同被下成物質的に精神を發起者との御援助を得たる事を發起者として深く御禮申上候、而して左記決算の如き金額を去る八日持參君が病末を見舞申候處諸兄の御同情に對し絶對安靜の身に感涙を浮べ感謝致し居り候間御申上候兄に御傳へ重ねて御禮申上候尚忙御成念なは存じ居り候同多忙諸兄も可有之存候へは期限後にも差支無之候故何卒御同情被下度申添候

十一月十九日發起者 古東幹太 石川健丸 塩原克己

同情者諸兄 記

一金六拾圓也 募集金總額  
一金貳圓也 募集雜費總額  
一金五拾八圓也 見舞金として

贈呈額

賛成者諸兄

五圓宛

小山西二郎君 太田愼一  
郎君 小林勸君 齋藤  
菊雄君 藤井周藏君  
古東幹君 石川健丸君  
塩原克己君

參圓宛 萩原孫三君 貞包新君  
貳圓宛 櫻井吉利君 糟谷達三樓  
壹圓 大井學池遊龜君 野本  
治兵衛君 金兒文夫君  
岡村源一君

陸 上田實録專門學校教授 金子 英雄  
陸 高公實業學堂教諭 天田吾三郎  
陸 シテ高等官六等ヲ以テ待遇セラル 久保田正樹  
陸 地方農林技師 高須 兵司  
陸 シテ高等官五等ヲ以テ待遇セラル 小林 康  
陸 地方農林技師 吉村 眞作  
陸 シテ高等官六等ヲ以テ待遇セラル 酒井 未吉  
陸 同 栗原 章  
陸 シテ高等官七等ヲ以テ待遇セラル  
陸 以上十一月二日  
陸 上根縣立松江農林學校  
陸 教諭兼島根縣立松江農  
陸 林學校舍監 越智 岩平  
陸 公立實業學校教諭兼公立實業學校舍監ニ任ス  
陸 高等官七等ヲ以テ待遇セラル  
陸 十一月五日  
陸 高知縣農林技手 大町 省三  
陸 地方農林技師ニ任ス  
陸 高等官七等ヲ以テ待遇セラル  
陸 六月十一日  
陸 公立實業學校教諭 中島靜太郎  
陸 昭和六年六月一日一年功加俸 年額百五十圓  
陸 七圓下賜 十月一日(岡山縣)  
陸 公立實業學校教諭兼公立實業學校舍監 越智 岩平  
陸 八級俸(當分千參百二十圓)下賜  
陸 十一月五日(島根縣)  
陸 從五位勳六等 朝比奈晃十  
陸 敘正五位 金子 英雄  
陸 敘正七位 金子 英雄  
陸 敘從六位 金子 英雄  
陸 上田實録專門學校教授 浦生 俊興  
陸 九級俸下賜(十一月三十日)

編輯室より

先月は針塚先生の還暦祝賀式、代議員會、講演會と忙の廻る忙がさだつた。理事者の多忙はもとより在田問答餘事諸君の寢食も忘れての努力は誠に感謝の外ない。今月もまだまだ始末で忙がしい、取敢ず御報告したいこととだけを記載してあとは次號にゆづる。

次號は新年號といふわけで一月一日に發行する、新年號には年賀廣告をしやうと眞腹も殖して新年號には編輯をしやうと思つてゐる、代議員會報告は都合上次號に登載の筈。

多忙多難なりし昭和六年も暮れる、諸兄の無事御越年を祈つて筆を納める。